

漢詩を味わう

第158回



乞猫 ねこをこう  
黄庭堅 こうていけん

秋来鼠輩欺猫死

秋来 しゅうらい 鼠輩 そはい 猫の死せるを欺り あなど

窺甕翻盆搅夜眠

甕を窺い かめをのぞ 盆を翻し ぼんをひるがえ 夜眠を搅す やまをま

闻道狸奴将数子

闻道 きく 狸奴 りど 数子を将ゆと すうしをひ

买鱼穿柳聘銜蝉

魚を買い い 柳を穿ちて うが 銜蝉を聘せん かんせんをひ

この秋になってネズミどもがネコの死をよいことに、水がめをのぞくは、ぼんをひっくり返すは、夜の眠りを妨げよる。聞けば、お宅のねこが子を数匹つれているそうだ。魚を買って柳の枝に刺し通し、ニヤンちゃんをお迎えしよう。

《秋来》 秋になって以来。

《欺》 あなどる。つけこむ。

《闻道》 きくところによれば。

《将》 ひきいる。

《聘》 招聘する。まねきよせる。

《銜蝉》 ネコの俗称。セミを口にくわえる意。

二年前にも陸游の猫を詠んだ詩「贈猫」を紹介しましたが、今月は黄庭堅の猫の詩を取り上げます。

黄庭堅の飼い猫が死んだことで、ネズミが家の中で好き放題です。水甕に入ったり、お盆をひっくり返したりとやりたい放題で夜も眠れません。そんなことから、近隣の家ででしょうか。数匹の子を産んだということを耳にした黄庭堅は「子猫を一匹下さいな」とねだった詩です。そして「猫には魚を買って最大限のもてなしでお迎えしますよ。」と結んでいます。

黄庭堅三十五歳の作品です。この年は友人で同じ旧法党に属する蘇軾が筆禍事件に遭い投獄され、年末には黄州に流されました。また後妻を迎えた謝氏が二十六歳の若さで病死した年でもあります。進士になって十二年が経ち、国士監教授という国の最高学府の教授の任にありましたが、公私ともに穏やかな心境で生活できる環境ではなかったと思われる時期に詠まれた詩です。

中国詩人選集（岩波書店）の解説文によると、黄庭堅は儒教的立場を標榜しながら老壯の道家思想および仏教思想に強い関心を払っていたとしています。事実、黄庭堅の詩には四書五経を典故とする語句の引用の外に、仏典や「胡蝶の夢」の逸話で有名な「莊子」の引用が多く見受けられます。莊子の文章には生き物に喩えた比喻寓話が多く登場しますが、黄庭堅の詩にも莊子と同様に、虫や鳥や動物たちが登場するものが多くあります。なかでも「演雅」という詩には、ざっと数えて三十二種類もの生き物が登場していますから驚きます。

黄庭堅の詩は仏教でいう「諦観」に通じる鋭さを感じる反面、機知とユーモアに長けて自然や動物たちへの愛着と融合への願望を感じさせ、そしてなんと言っても温かさがあります。

参考文献・中国詩人選集（岩波書店）・中国古典名言辞典（講談社）

※胡蝶の夢Ⅱ 莊周（莊子）が夢を見て蝶になり、夢が覚めて、果たして莊周が夢を見て蝶になったのか、あるいは蝶が夢を見て莊周になっているのか。夢が現実か、現実が夢か。つまり人生が何であるかは分かったものではない。という説話。

月華星彩坐来収まる 嶽色江声暗に愁いを結ぶ 半夜灯前十年の事 一時に雨に和して 心頭に到る

日暮星彩坐来収まる 嶽色江声暗に愁いを結ぶ 半夜灯前十年の事 一時に雨に和して 心頭に到る

《大意》月の光、星のきらめきはいつとはなしにうすれゆき 山の色、江の流れる音が、ひそかに憂鬱な思いを凝り固まらせる。夜が更けてともしびの前に、眠らずにいると、十年来のさまざまな出来事が、雨の音とともにどっと胸の中におしよせてくる。(杜荀鶴詩・旅懐)

順に処す

愛順

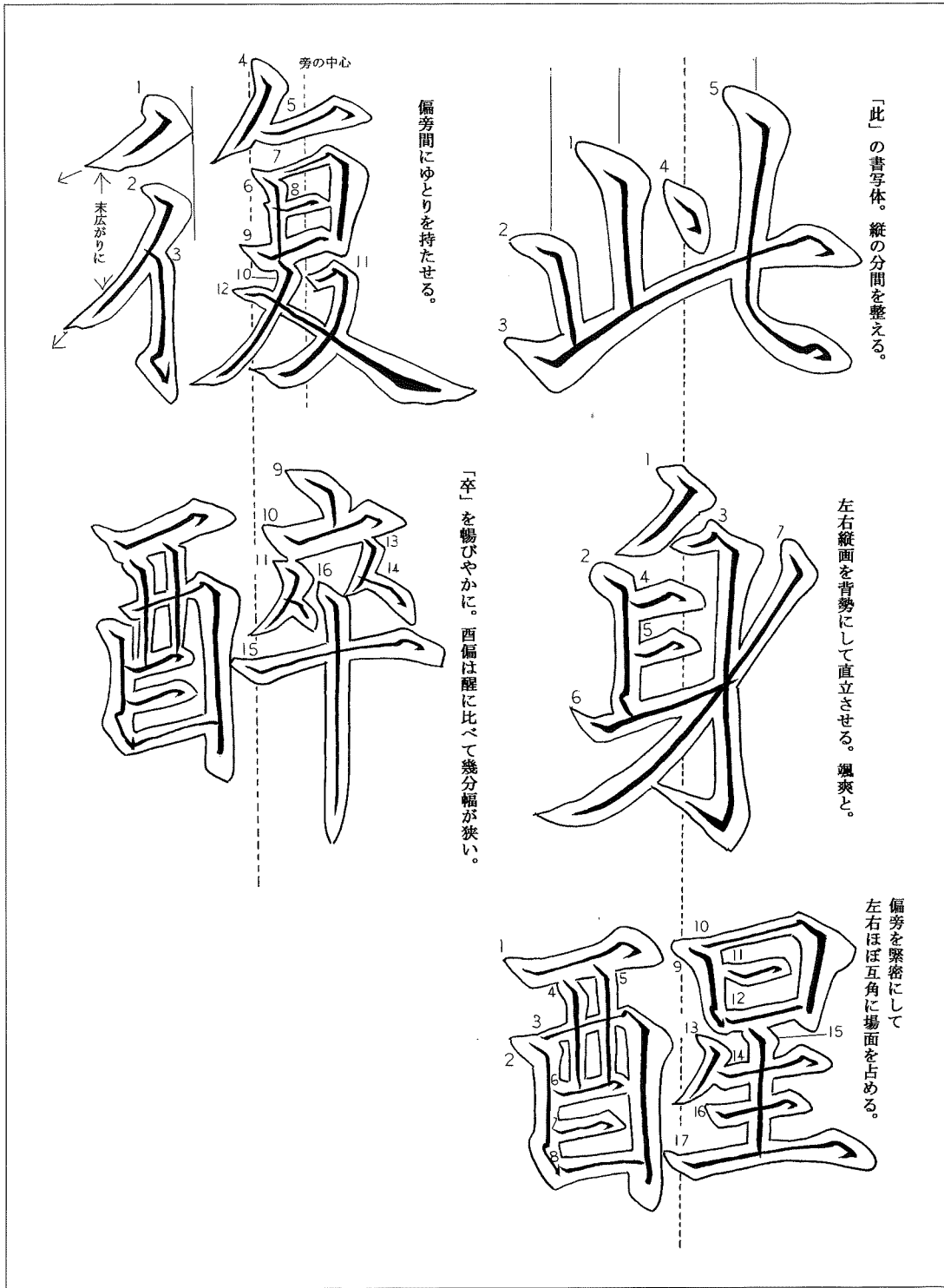
處順

《大意》一切を自然のままにふるまう。(莊子・養生主)

読み 此の身 醒めて復た酔う (酔い醒めてまた酔うのも人生)

此身醒  
復酔

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について  
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。  
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。  
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

杜甫詩

「春 歸」

苔徑臨江竹

苔徑 江に臨む竹

茅簷覆地花

茅簷 地を覆う花

別來頻甲子

別來 頻りに甲子

歸到忽春華

歸りに到れば 忽ち春華

倚杖看孤石

杖に倚りて 孤石を看

傾壺就淺沙

壺を傾けて 淺沙に就く

遠鷗浮水靜

遠鷗は 水に浮かんで靜かに

輕燕受風斜

輕燕は 風を受けて斜めなり

世路雖多梗

世路 梗ること多しと雖も

吾生亦有涯

吾が生も 亦だ涯有り

此身醒復醉

此の身 醒めて復た酔う

乘興即為家

興に乗じて 即ち家と為さん

草書

行書

復  
醉  
醒  
此  
身  
醒

復  
醉  
醒  
此  
身  
醒

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

為  
家  
乘  
興  
即

復  
醉  
醒  
此  
身  
醒

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	桐一葉	順位	氏名
目当たりながら落ちにけり			

高浜 虚子

和泉 溪石 先生書

耽讀翫市寓目囊箱  
 耽讀翫市寓目囊箱  
 沈讀既市寓目囊箱

佐藤 象雲 書

音

タンドクガンシ  
グウモクノウソウ

略解

外に出ては、昔、王充が書店で書物を読み耽ったように  
内では袋や箱に入った文学を一心に研究するよう、心得よ

川有  
有  
注



(澤は) 注ぐ所有り、川は(通ずる所) 有り……

象雲臨

■石門頌せきもんじょう(後漢・西暦一四八年)の臨書(3)

『有所注川有』

石門頌は八分隸の最盛期の前半を代表する名品です。以前に勉強したほぼ同時代の礼記碑や約四十年後の後漢の掉尾を飾る曹全碑などは、整齐で形質も申し分なく、八分隸の典型として挙げられます。これに対して石門頌は、自由闊達で固くなく古拙の風韻が漂います。磨かれた石に彫られた碑とは違って天然の岩壁に彫られた摩崖碑であることが大きな要因の一つです。ちなみに以前は磨崖と書かれていたものが、「摩崖」と呼ばれるようになったのは、金石学が勃興し始めた宋代になってからと言われます。

石門頌は細い線を基調としているために、起筆の藏法、すなわち縦横画ともに入筆では穂先を巻き込むように逆入する筆使いが判別しにくいのですが、藏鋒を基本にして用筆しないと隸書の古格が表現できませんので、特に注意が必要です。



弘  
濟  
万  
品

ひろく万品を濟い……

弘  
濟  
万  
品

象  
雲  
臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (17)

『弘濟万品』

集字聖教序は蘭亭序とともに王羲之の行書の名品として双璧を成すものですが、集字聖教序は王羲之の文字を拾い集めて作った集字碑で、蘭亭序は後人が臨書したもので、いずれも王羲之のものではありません。さらに集字聖教序は王羲之の同じ法帖から集字したのではなく、どうしても文字が不統一です。それは大小に関してだけではなく、書体に関しても楷書に近い固い行書、草書に近いあるいは草書の柔らかいものまで、多種多様なものが混在しています。もともと行書体は範疇が幅広い書体です。硬く表現すれば限りなく楷書に近く、連綿を多用して流動性や線の簡略化を図れば、草書に近寄ります。この集字聖教序を学ぶことは、王羲之の多面性を学ぶことと言えるかもしれません。

今月は「濟」が突出して大きいのですが、集字の作業をした僧懷仁が、繁画の字は大きくするという原則に従って調整したものと思われます。いずれにしても文字間の気脈はありませんので、全体の調和を考えて、半紙に収めて下さい。